

地方靈山における行者道踏査の可能性

— 中世の丹沢と大山寺修験 —

元海老名高校・日本山岳修験学会 城川 隆 生

一 はじめに

かつて、日本列島の各地に山岳宗教者の拠点があり、その活動があった。山岳宗教者は、山頂から山麓に至るヴァラエティに富んだ地形を神仏の顕現する聖域または行場として認識し、修行を通して獲得した験力を里人のために行使するという宗教活動を行っていた。彼らが実践していた諸儀礼は、中世期に次第に体系化されるとともに宗教者の組織化もはじまり、「修験道」へと発展した。山岳宗教者の儀礼は、入峰修行をはじめ様々な加持祈祷、符呪（まじない）、巫術（シャーマニズム）から構成されている。その中でも、入峰修行は修験者にとつての宗教的なパワー（聖性）の源であり、俗の世界において経済行為でもある宗教活動を展開するためにも欠かすことの出来ないものであった。

峰中の儀礼はマンガラ世界に見たてた山中の各行所で行われる祈祷・修行の体系であり、各行所を結ぶルートや移動そのものにも儀礼的な意味があった。従って、行者道の踏査は、宗教者が持っていた空間認識（山岳マンガラ観、開山上人の修行の追体験など）の解明を目指すことでもある。

また、里人にとつての「雨乞いの滝」「登拝の峰」「村の社」は、「山」の視点（山岳宗教研究の視点）から見ればそれぞれが「滝行の滝」「行所の峰」「神体山遥拝の宮」である。つまり、行者道と宗

教者の空間認識の解明は、里人の信仰を理解するために新たな視点を提供することでもある。それに加えて、尾根筋を基本とする行者道は古代・中世にさかのぼる歴史を持っている。近代化の波に飲まれその姿を変えつつある「山」にも歴史的古道が存在することを有意義な知見として現代社会に提供できれば幸いである。筆者は、丹沢の行者道を以下の五つの観点に整理して踏査・考察を行ってきた。

① 古代山林修行の行者道
② 中世大山寺修験（大山修験）の行者道

③ 近世八菅修験の行者道

④ 近世日向修験の行者道

⑤ 近世木食僧の行者道（日向 浄発願寺 弾誓派）

先行研究を紹介すると、③八菅修験については、一九七〇年代半の慶應義塾大学宮家研究室チームによる研究・踏査があり、それは『修験集落 八菅山』（愛川町 一九七八）にまとめられている。また、④日向修験については、一九六三年に『峯中記略扣』が発見され、それにもとづいた地方史家（日向修験大泉坊末裔）小沢幹氏の調査がある。これらの先行研究を参考に、また日向修験については新たに筆者が比定した行所を加え作成したのが【図一】である。①古代山林修行については、二〇〇〇年に発見された鐘ヶ嶽廢寺が注目に値する遺跡である。近年、平野部の古代官寺（東大寺、国分寺など）と山林修行エリア・山寺・山房との関係が注目されているが、出土瓦から「官」の性格が強いと考えられるこの山寺も本格的な調査が待たれる遺跡である。

本論においては、①～⑤の中でも従来全く不明であった②中世大

山寺修験（大山修験）の修行空間の解明を通して、「丹沢」という地方霊山における行者道踏査の可能性を考察してみたい。（※「丹沢」は山地全域を指す歴史地名ではないが、便宜上、本論では使用する。）

二 宗教者の空間認識

古代の山林修行者が個人で行っていた抖擻・籠山修行や山岳寺院の行道・供華修行が、集団で行う「峰入り」（入峰）儀礼へと発展したのは、平安時代中期～院政期の熊野・大峰であると考えられる。そして、峰入り儀礼成立期の修行エリアに対する宗教者の空間認識を示す重要なテキストが、大峰（吉野・熊野）・葛城（金剛山地）和泉山脈）・笠置山（笠置山・長谷）の『諸山縁起』（内題は『大峰縁起 葛城縁起 一代峯縁起』）である。『諸山縁起』が編集されたのは中世前期であるが、そこには平安期から修行者に伝えられてきた「山岳マンダラ観」が具体的に表象されている。

『大峰縁起』の一部を引用する。

「…（略）… 峯、虚空无边超越菩薩嶺【前鬼裏行場三重の滝】、瀧三重在、上如法経二部御座、行者御経也。峯、憤怒持金剛菩薩嶺、瀧之上千手観音三寸鉢御座、国王御本尊也、使菊南五度。…（略）… 別大日山在佛生土石在五天石在、釈迦牟尼佛【深仙】、神仙者大日嶽名云、深仙者尺迦嶽云、山崎聖人云、此銀尺迦七寸佛弘微殿女御護佛安置五寸、深仙。…（略）… 佛生土石之峯ナルカケト云、大輪佛頂輪輪菩薩嶺【釈迦ヶ岳】、大通智勝佛宿、壽元聖人安置給、七度時興福寺別當法印御佛也云傳。…（略）… 【※】は現在の比定地（『大菩提山等縁起』五来重

編『修験道資料集Ⅱ』名著出版 一九八四、『諸山縁起』桜井徳太郎他編『寺社縁起』岩波書店 一九七五）

傍線の地名は胎蔵界マンダラの諸尊であり当時の行所名でもある。峰入りの山伏たちは、大峰山地に描かれたマンダラの図像上の諸尊を、あたかも「すごろく」のように移動して行く。

しかし、その当時のマンダラ上の行所名は現在の修験教団にはほとんどが伝わっておらず、すべての場所を特定するのは難しいが、「両部分け」を境にした胎蔵界・金剛界の大まかな山岳マンダラ観は今でも確固として受け継がれ峰入りが行われている。また、このような山岳マンダラという空間認識は、修験者には広く共有されている。周辺の里の信仰とは断絶している。まさに山岳マンダラ観は山岳宗教者集団独自の空間認識であった。

このような空間認識は、やがて全国の修験霊山に受け入れられ、各地の中世前期にさかのぼる古縁起にも記されている。それを、縁起の地形表現の分析とフィールドワークをもとにモデル化したのが【表一】である。

寺社縁起は、一般に寺社の靈験を対外的に喧伝するためのものというところをえ方をされているが、修験系寺社縁起には、修行エリアの空間認識を宗教者の中で共有し伝承するためのテキストを含んでいるものが多い。修験系寺社縁起の地形表現には高い史料的价值があるのである。

三 『大山縁起』と宗教者の空間認識

丹沢山地においては、大山の宗教的重要性を無視することはできない。相模平野で古代から神聖視されていた山であり、ほとんどの

古代山岳寺院は大山から伸びる尾根筋・谷筋の山腹・山麓や前山（端山）にあった。また、その中でも、大山の三つの谷（大山町・日向・蓑毛）は遥拝・登拝拠点として後世に至るまで特別な聖域であった。そして、近世末まで峰入り修行を続けていた八菅修験・日向修験ともに大山を重要な行所としていた。

その大山を拠点に、かつて活動していたのが一山組織「大山寺」に所属する大山寺修験（大山修験）であった。中世期の丹沢山地最大の修験集団であったと考えられているが、近世初期に政治的な圧力を受けて事実上壊滅し、多くの山伏は山麓の「御師」に転身して門前町「大山町」を形成することになった。江戸期の大山参りの大流行は彼ら御師によって支えられた。

その大山寺の縁起が『大山縁起』である。『大山縁起』には縁起絵巻のテキストとしてよく知られている仮名本と、そのもとになった真名本（漢文体）が存在する。仮名本の一つ、大津本の奥書には享禄五（一五三二）年とあり、室町時代末に始まる庶民の全国的な巡礼・参詣行動の盛り上がりに対応した編集になっている。江戸時代の御師が唱導に活用したのもこの縁起絵巻であった。

それに対して、真名本は中世前期にまでさかのぼると考えられる、行場説明に詳しい修験的要素の強い縁起である。しかし、従来は山岳宗教の視点での研究がされておらず、修験系縁起特有の行場表現も、山内の不明な地名という認識で扱われていた。すでに、江戸時代天保年間の『新編相模国風土記稿』においても、「山中の嶽、及び巖窟瀑布等の名を載す」として山内の「二重瀧」「雷瀧」と同列に多くの行場地名を羅列しているにすぎない。

まず、『大山縁起』の行者道テキストを引用する。

A 「恒有神。名石尊権現。本宮【山頂】東北有岩窟。名金色仙窟。以金色仙人優遊也。五大明王兩界大日坐。岩窟東有高山。名妙法嶽【三峰山】。本願聖人奉納如法華經一部。故云。一仙人常影向現此嶽。讀誦法華。讀誦法華音聲于今不絶。時間故云。西下有仙窟。諸仙之遊栖地也。有奇峰。名祖母山【丹沢表尾根のピーク】。常遭仙人。不遠而有嵩。名大日嶽【木ノ又大日または日高】。次有岩窟。窟内兩部大日坐。次有聖天所坐深洞。南下有高岩。名不動窟【不動ノ峰の近く】。次有塚。名十羅刹塚【鬼ヶ岩】。仙人恒顕現。次有嵩。名烏瑟嶽【蛭ヶ岳】。

B 「次有嵩。名石遲草嶽。有巖洞。其高三丈餘。岩戸前有石壇。壇上三本莽。左右雙立。正身不動明王坐。次有瀧。名兩部瀧。阻山北有瀧。瀧高七丈餘。是爲金剛界瀧。時々放圓光。對胎藏瀧有高岩。下有仙窟。列眞之所都也。有振鈴之聲。今聞。有岩窟。亦有靈石。表五佛形。或華嚴般若峰。或法華方等異岩。呈神瑞。教岩標法。如斯秘所。萬々相傳。有別説。上人登峰。斗藪三十五日也。」

〔大山縁起〕真名本 小島瓊禮『神奈川県語り物資料―相模大山縁起―（上）』神奈川県教育委員会一九七〇

（※）は現在の比定地

傍線部の「遠からず」「次」「斗藪」（抖擻、中世期にはこの漢字表記も珍しくない）といった表現から、このテキストが移動する修行者の視点で広い山域を説明していることは明らかである。しかも、開山上人や行場開拓者（大山の場合は良弁、全国的に多いのは役小角）の修行ルートを追体験しながら峰入ると意味づける、修験系神社縁起の典型的な叙述方法で記されているのである。

このテクストをもとに、抖擻ルートの基本である、もつとも重要な靈山（もちろん大山）を遙拝しながら移動できる尾根筋の行所を比定して行くと、それが、大山北尾根く札掛く表尾根く蛭ヶ岳（こ）こだけは大山遙拝は不可能だが」という、大山山頂を基点にして丹沢山地を時計回りに回峰する修行であったことが見えてくる。また、それは近世の日向修験と連続する空間認識の存在をうかがわせるものである。この『大山縁起』の聖域空間を概念図にしたものが【図二】である。しかし、このテクストの後半部Bが記す行所はこの段階では比定することができなかった。

四 『今大山縁起』と塩川の谷

愛川町半原に今大山不動院清瀧寺という大山と同じ由緒伝承を持つ山麓の小寺院が明治二年まであった。寛文五（一六六五）年に編集されたこの寺の『今大山縁起』には、過去に大山からここに拠点を移した宗教者の存在を伝えている。そして、この縁起は寺の周辺を聖域として詳細な地形表現で説明している。

以下が『今大山縁起』の地形説明テクストである。

「為寺院四辺之状也、東者有塩竈之滝、七丈有余而、飛流直下這曝瀑布、是名金剛滝、常対胎藏界之滝、西者有明王嶽、八紘岌山業（我）而、乍峇、拔地擬忿怒、是処応迹云、降恒御明王之安座越起、望法華方等之異石、花巖般若之岑直頭、初当鷲嶺鹿園之儀盤恒、顧北天照大神之皇宮勸請、神社之方載、是均見說勢州清浄之地焉、曾亦広林之山頭山長、号如龍臥峯峙号似虎踞、清風徐吹明月斜来、風雅之道自封矣、彼滝下安飛滝権現之鎮座、紋神祠於丹塗琢、社檀於瑞籬、靈徳卓尔、機激則利見威肅、巍然然（然）

而人感則垂象、又有高岩、岩下有仙窟、別真之所、都塵埃相去、六情亘及、鈴音響于朝夕、厥音通于山川、聞之者驚無明昏夜、信之者弘身心有為應焉、其外靈石燦然而、表五仏之尊容、凡是如来有応之処、豈在干異処乎、十手所指、十目所視、無盡壯觀」
〔今大山縁起〕 神奈川県『神奈川県史 資料編8近世（5下）』
神奈川県一九七九 他

この縁起を読んだ時に、筆者はデジャブのような感覚を覚えたことを記憶しているが、一年ほどたつてから、なぜそう感じたかには気が付き納得した。つまり、『大山縁起』と『今大山縁起』がもとは共通の地形説明テクストをもとに編集されたのが明らかだからである。

『今大山縁起』で記す

「東者有塩竈之滝【塩川の滝】、七丈有余而、飛流直下這曝瀑布、是名金剛滝、常対胎藏界之滝」は

『大山縁起』の

「次有瀧。名両部瀧。阻山北有瀧。瀧高七丈餘。是爲金剛界瀧。時々放圓光。對胎藏瀧」に対応しており、

『今大山縁起』の

「又有高岩、岩下有仙窟、別真之所、都塵埃相去、六情亘及、鈴音響于朝夕」は

『大山縁起』の

「有高岩。下有仙窟。列真之所都也。有振鈴之聲。今聞」に、

『今大山縁起』の

「其外靈石燦然而、表五仏之尊容」「望法華方【経ヶ岳】等之異石【経石】、花巖般若之岑【経ヶ岳く華巖山】直頭」は

『大山縁起』の

「有岩窟。亦有靈石。表五佛形。或華嚴般若峰。或法華方等巽岩」に対応している。(※【一】は現在の比定地)

つまり、『大山縁起』の行者道テクストBは、現在の仏果山・塩川の滝・経ヶ岳・華嚴山一帯を行場として説明していたのである。しかも、『両縁起』に記されている「法華方」は、現在も「法華峰」(ほっけほう)と表記され小字名や林道名として使われている。

さらに、『大山縁起』では「両部瀧」として複数の滝を説明している。果たして、探しに行くと、塩川の滝以外にそれに匹敵するほどの大滝が二つ存在し、地元の伝承地名で金剛・胎藏両界(両部)の名が伝えられていたことがわかった。

八菅修験の山伏も春の峰においてこの塩川の谷から山岳抖擻に入っていたが、それは、この塩川の谷を山岳マンダラの出入口とみなす共通の空間認識の存在を示している。

以上の分析から比定した大山修験の回峰行場想定図が【図三】である。

五 中世の丹沢山岳マンダラ

黒田俊雄氏の顕密体制論以降、中世仏教研究は大きく様変わりした。特に、かつて常識のように語られていた「鎌倉新仏教」は、中世前期においては少数派に過ぎず、中世前期はあくまでも八宗体制(南都六宗+天台・真言)・顕密体制の時代であったことが、中世寺院組織の研究等によって明らかにされてきた。それと同時に、全国山岳寺院の一山組織の中で、平安期から中世にかけて、「堂衆」(華衆・花衆・夏衆・承仕など、各寺院の職能によって呼称が違う)ク

ラスの宗教者を中心に修験化が進み、熊野信仰の隆盛を背景に、峰入り儀礼が受け入れられていったと考えられるようになった。

峰入り儀礼の成立は、その山岳寺院にとつて重要な霊山・山域に山岳マンダラを描くことでもある。このような宗教的な空間認識と峰入り儀礼は表裏一体のものである。

【図二】「八菅修験と日向修験の行者道」と【図三】「大山修験回峰行場想定図」で示したように、大山寺修験には近世の八菅や日向の行者道を包括する丹沢山地広域にわたる行場空間の認識があったことは明らかである。また、この空間認識は丹沢山麓の修験集団に共有されていたはずである。「横のベクトル」と尾根筋から構成される修行エリアでは、山麓の各修験集団がそれぞれ別々に山岳マンダラとルートの設定をした例はない。(※【表一】参照)

そして、中世前期には、この修行空間の出入口を東南の大山、東北の塩川の谷とし、大山に向けて徐々に標高を上げる東丹沢が胎藏界マンダラ・春の峰、標高の高いピークとアップダウンが連続する表尾根・主脈が金剛界マンダラ・秋の峰とする空間認識が当初あったと考えられるのではないだろうか。

六 おわりに

地方霊山における行者道踏査には多くの困難がある。まず、文字テクスト史料が畿内に比べて極端に少ない。それに、神仏分離・修験道廃止令時の山伏の還俗等により抖擻修行の伝統は途絶えている。かつての信仰対象物も破壊や盗難によって多くは失われた。林業生産・植林・観光・採石による山の開発、地震や風化による山道や景観の変化も大きい。山岳宗教に対しては学校教育で取り上げら

れることも少なく、歴史研究者や地方史家の中にも誤解と無理解が
まかり通っているのが現状である。

しかし、全く可能性がないわけでもない。それは、山岳宗教史研
究や寺社縁起研究の分野での、史料に対するまなざしの変化である。
また、考古学による研究成果は、古代山林修行と中世の修験行場と
の連続性を明らかにしつつある。従来の自治体単位の地方研究を超
えた視点を持てば、山城・山麓を広域にとらえ直すこともできるは
ずである。そして最後に、埋もれたテキスト・遺物の発見の可能性
がまだありうることにぜひ触れておきたい。(もし新しい情報が
ありましたらぜひ教えてください。)

〔参考文献〕

拙著『丹沢の行者道を歩く』

白山書房 二〇〇五

拙論「地方霊山における山岳宗教者の空間認識―丹沢山地と大山―」

(放送大学大学院文化情報科学群修士論文) 二〇〇四

愛川町教育委員会『愛川町文化財調査報告書 第一八集

あいかわの地名』愛川町教育委員会一九九一

伊勢原町『伊勢原町勢誌』

伊勢原町 一九六三

小沢 幹「日向山霊山寺(通称日向薬師)の諸史料について」

『伊勢原の歴史 第6号』伊勢原市史編集委員会 一九九一

加藤芳明・富永樹之「厚木市七沢の鐘ヶ嶽採集の瓦について」

『神奈川考古36』神奈川考古同人会 二〇〇〇

清川村『清川村地名抄』

清川村 一九八二

楠原祐介・溝手理太郎編『地名用語語源辞典』

東京堂出版 一九八三

小島瓊禮『神奈川県語り物資料―相模大山縁起―(上)(下)』

神奈川県教育委員会 一九七〇・一九七一

鈴木正崇『修験集落八菅山』『山と神と人』淡交社 一九九一

富永樹之『神奈川の経塚』

『神奈川考古 三八』神奈川考古同人会 二〇〇二

長野 覚『彦山修験道の歴史地理学的研究』名著出版 一九八七

西垣晴次『大山とその信仰』『大山信仰』雄山閣 一九九二

根本行道『日向山伏の丹沢縦走』山村民俗の会

『あしなか』第五冊(第八四輯)名著出版 一九八一

宮家準研究室(慶應義塾大学)『修験集落八菅山』

愛川町 一九七八

吉田茂樹『日本地名語源事典』

新人物往来社 一九八一

☆本論の基本的な内容は、二〇〇五年十一月五日に行われた日本

山岳修験学会犬鳴山学術大会における発表とほぼ同じものであ

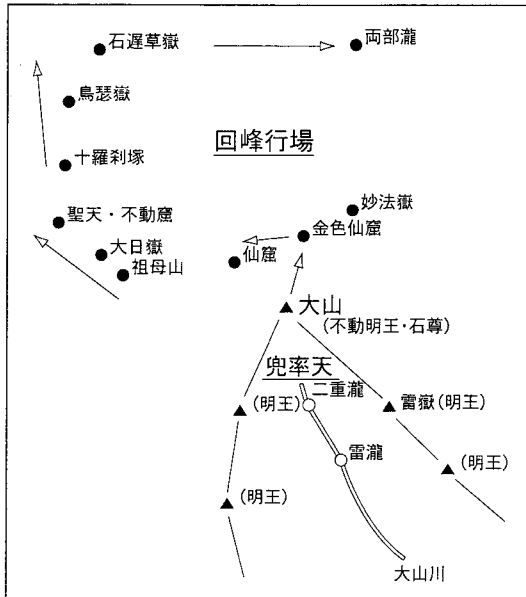
る。

【表一】 中世寺社縁起に表れた空間認識モデル

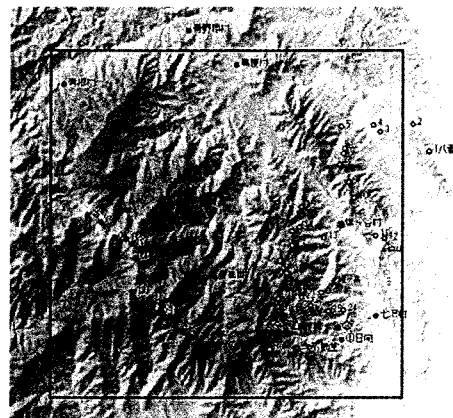
座標軸	空間認識のモデル	顕著な例
修行集団の拠点とネットワーク	それぞれが修行集団を持つ複数の聖地のネットワークから構成された入峰空間	大峰、葛城
	修行集団の拠点を始点に聖地を巡る入峰空間	笠置、白山、富士山、走湯山
人里との距離	人里に近い聖地で結ばれ巡礼的要素も含む入峰空間	葛城、走湯山
	人里から離れた山中を中心に構成された入峰空間	大峰、白山、富士山
縦のベクトルと横のベクトル	アップダウンと横のベクトルから構成される入峰空間	大峰、葛城、笠置、走湯山
	山頂にある最高の聖地への登拝(禪定・禪頂)を最も重視する入峰空間	白山、富士山
山と海	尾根道上とその周辺の聖地	大峰、葛城、笠置、白山
	辺地	走湯山・伊豆、江ノ島
仏教的空間認識	両界曼陀羅または三部曼陀羅	大峰、笠置、走湯山、江ノ島
	法華曼陀羅の図像をイメージした両界曼陀羅	富士山
	法華経二十八品	葛城
	三仏(=三神)の聖地	白山
	浄土(補陀落、兜率天)	大峰、笠置、走湯山
	地獄 ※	

ここにあげたモデルはあくまでも縁起中の空間認識の要素から抽出した理念型であって、全てがすっきりと分類されるわけではない。なお、※地獄については立山・箱根山・走湯山等の信仰史から考えて、一つのモデルとして取り上げておきたい。

【図二】『大山縁起』の聖域空間概念図



【図一】八管修験と日向修験の入峰空間



【図三】大山修験回峰行場想定図(16km×16km)

